

地域資源デジタルアーカイブによる地域活性化の研究 ～郡上白山文化遺産デジタルアーカイブによる知的創造サイクルの実現～ Research on regional revitalization through regional resource digital archives

久世 均*1 熊崎 孝之*2

知識循環型社会においてデジタルアーカイブを有効的に活用し、新たな知を創造するという岐阜女子大学独自の「知的創造サイクル」の手法により、地域課題に実践的な解決方法を確立するために、地域に開かれた地域資源デジタルアーカイブによる知の拠点形成のための基盤整備をした。このことにより、地域課題に主体的に取り組む人材を養成する大学として、地方創成イノベーションの実現と伝統文化産業の振興ならびに新たな観光資源の発掘を行うことができる。また、本研究を地域のフィールドにおける実証検証をするための研究として捉え、解の見えない地域課題の解決をするための地域資源デジタルアーカイブによる地域活性化を高大連携して行ったので報告する。

<キーワード> デジタルアーカイブ, 地域資源, 知的創造サイクル, 白山文化遺産

1. はじめに

本研究は、文部科学省の平成29年度私立大学研究ブランディング事業に「地域資源デジタルアーカイブによる知の拠点形成のための基盤整備事業」で採択され、3年間継続して研究を進めた。

この、地域資源デジタルアーカイブによる知の拠点形成のための基盤整備事業は、地域資源のデジタルアーカイブ化とその展開によって、地域課題の実践的な解決や伝統的産業の活性化ならびに新しい文化を創造できる人材育成を行い、岐阜地域の知の拠点となる大学を目指すものである。

具体的には、岐阜県が掲げる地方創成イノベーション計画に呼応し、岐阜県における地域の代表的な伝統文化産業と観光資源について、デジタルアーカイブ化とその利活用を行い、地域の活性化を行った。

2. 現状と課題

岐阜県の長期構想において、地域資源を活かしたまちづくりが重点課題となっている。岐阜県観光振興プラン（平成25年3月）でも、観光資源の発掘とそれを支える人材の養成が重要課題と位置づけられている。しかし、これまで大学と地域との連携は十分でなく、地域の真のニーズに応えた教育や研究が大学でなされてきたとは言い難い。特に、農山間地が多く自然が豊かな岐阜県では、木工等に関する伝統産業の継承や美しい観光資源の活用と発掘が重点課題となっており、それを担う人材の育成と供給が重要となってきた。このために本学では、デジタルアーカイブの拠点大学として2013年より、デジタルアーカイブにおける「知的創造サイクル」を開発し、地域資源デジタルアーカイブにおける「知的創造サイクル」の構築ならびに人材養成に不可欠なカリキュラムと教材の開発を行ってきた。具体的には、地域課題を次のように設定した。

・郡上白山文化遺産の観光資源化への整備

*1 KUZE, Hitoshi 岐阜女子大学 *2 KUMAZAKI, Takayuki 岐阜県立郡上北高等学校

と新たな観光資源の発掘

- ・ 建造物，建築物群を含めた伝統文化遺産の調査・収集と整備
- ・ 衰退する白山信仰の三馬場の復活

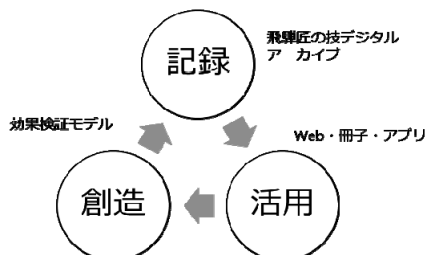


図1 知的創造サイクル

そこで、これらの課題を解決するため、2005年に報告された我が国の知的創造サイクルの理念を基に、図1のように実際に地域資源デジタルアーカイブにおける「知的創造サイクル」を実践的に研究し、その成果を随時 Web で詳しく公開している。

3. 期待される成果

本事業での期待される成果を示すために、各地域課題について解決するため2つの仮説を立てた。

(1) 郡上白山文化遺産のデジタルアーカイブと新たな観光資源の発掘

- ・ 郡上白山文化遺産のデジタルアーカイブ 文化的伝統の収集と調査・建造物，建築物群の歴史的な価値の調査・白山信仰の三馬場の調査において「知的創造サイクル」を構成し，新たな観光資源の発掘を支援する。

(2) 地域の経済・社会，雇用，文化の発展

- ・ 上記の地域課題に対して，「知的創造サイクル」の有効性を実証する。

このように地域の知が適切に循環・増殖することで新たな価値の創造と，これらを実践できる高度な専門的な知識を持つ人材の養成による雇用の創出を促進し，その結

果として「知的創造サイクル」としてデジタルアーカイブの効果が認められ，さらにデジタルアーカイブの新たな展開が期待できる。

本事業では，こうした広がりを持つ「大学という存在の全体」を見渡し，その使命を見据えたうえで，現在の地域資源を後世に総合的に伝えていくために，資料を集め，「知的創造サイクル」により新たな価値の創造と雇用の創出による県内の経済・社会，雇用，文化の発展等のために構造的に保存するデジタルアーカイブの開発研究とそれを支える新たな人材養成を全学的な優先課題として目指すことにした。

4. 高大連携による地域課題探究型学習

(1) 目的

ここでは，G 高等学校（以下，G 高校）が推進する「地域をテーマにした課題探究型学習」として，G 大学と共同で観光冊子「郡上探訪 郡上であそぼ」（以下，観光冊子）を制作した実践の記録と生徒の変容的評価をまとめた。

実践校である G 高校は創立 72 年目の中山間地域に所在する学年 3 クラスの小規模校である。1 クラス内に，国公立大学への進学希望から就職希望まで多様な進路希望をもつ生徒が混在している。G 高校では地域を学びのフィールドと位置づけ，将来，郡上市に貢献できる人材を育成するための課題探究学習に取り組んでいる。

「UIJ ターンの促進・支援と地方の活性化—若年期の地域移動に関する調査結果—」（独立行政法人労働政策研究・研修機構 2016）では，地域社会の課題や魅力に着目した探究的な学びの経験は，生徒自身が地域社会をよりよくすることができるという実感をもつことになり，地域への愛着につながると述べられている。このことから，

地域との連携は生徒の進路選択に一定の影響を与えるものと考えられる。G 高校においても、図 2 のように実際に生徒が積極的に地域に出て活動に参加するようになった平成 27 年度卒業生から、就職先を郡上市内とする生徒数は増加傾向にある。

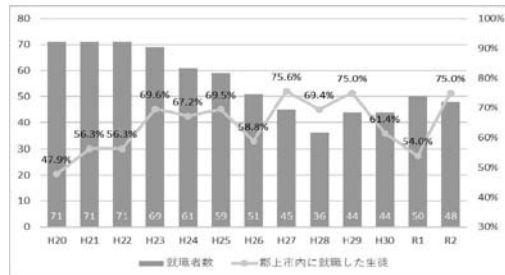


図 2 G 高校就職者の市内就職率の動向

また、G 高校では、地域と連携した学びが評価され、令和元年度には、地域協働活動における文部科学大臣表彰を受賞している。以降 G 高校では地域との連携をさらに推進すべく令和元年度入学生より単位制普通科となったことを機会に、カリキュラムを大きく変更した。

生徒は、1 年次では共通カリキュラムを履修し、2 年次からは興味関心や進路希望に基づいて、進学コース、福祉・介護コース、地域産業コース、観光・ビジネスコースの 4 コースから選択をする。進学コース以外は商業科、家庭科の専門科目や学校設定科目を 13 単位～24 単位履修することができ、普通科ながら総合学科のように多様な科目を選択することができる。

また、学校設定科目として、令和 4 年度から年次進行で実施される新学習指導要領を見据え、地域産業探究、地域探究、観光ビジネスといった地域をテーマに探究する科目を開講している。その理由として、中山間地域の多くが消滅可能性都市であり、地域から人口を流出させないための方策の 1 つとして、「社会に開かれた教育課程」の充実が求められていることが挙げられる。このことは、「岐阜県教育振興基本計画」(岐

阜県教育委員会 2019) においても、G 高校のような中山間地域に所在する学校は、生徒が積極的に地域の人々と関わり、地域をテーマにした課題探究活動に取り組むことで地域の魅力を知る機会を設けることが重要であると述べられている。

本実践は、中山間地域における学校での課題研究または総合的な探究の時間のふるさと教育の具体的な実践であり、高等教育機関や地域と協働の例として他校でも実施できる取り組みになると期待できる。

(2) 「郡上探訪 郡上であそぼ」

観光冊子を制作した授業の概要については下記のとおりである。地域産業コースに所属する生徒が選択科目として履修し、本来であれば 4 月から毎週木曜日に県内にある職業能力開発校での実習を経て、6 月から郡上市内の製造業、建設業での就労実習をする予定であった。つまり、この科目を選択する生徒は基本的に郡上市内での就職を希望する生徒が多いことが特徴である。

□授業名：地域産業探究（学設科目）

6 単位

□生徒数：2 年生 10 名(男子 9 名女子 1 名)

□担当者：教員 3 名

□実施日と実施時間：6 月～8 月(9 回)

この地域産業探究は、本来郡上市内の就職を目指す生徒のために実習を実施する科目であったが、新型コロナウイルス感染症対策のため、8 月まで校外での実習を自粛せざるを得ない状況下になった。そのため校内で実施できることを検討したところ、シラバスに「①地域の各種産業を支える機関と連携を図り、地域の産業を幅広く知る。②実習、体験学習を通して社会人に求められる様々な能力を養い、郡上を誇りに思い、郡上に貢献でき、郡上を支える人材の育成をする。」とあり、この期間において、郡上

市を知ること重点を置いた実習を組むことにした。オリエンテーションを実施する中で、生徒から「コロナ禍で郡上市外へ出かけることが難しい時だからこそ、地域の観光地を調べ、郡上市民に知ってもらいたい」という意見がでた。このような生徒の前向きな意見を取り上げることで生徒の主体性を伸ばせると考え、その意向を汲んで観光冊子を制作することにした。

(2) 高大連携事業

G 大学は岐阜県内の大学とはいえ、コロナ禍の状況で来校しての指導は難しいと考え、主にオンラインでの指導をした。オンラインツールは Zoom を利用し、大学側がホストになり、G 高校の生徒は学校から貸与されたタブレットで参加した。観光冊子の作成フォームは G 大学が作成している観光冊子のものを利用した。

観光地を紹介する文章は、200 字前後しか入力できないため、掲載しきれない写真や観光地の魅力は、G 大学が蓄積しているデジタルアーカイブに誘導する QR コードを掲載することにした。

表 1 想定した能力要素

柱	能力要素	定義
前にふみだす力	①主体性	物事に進んで取り組む力
	②働きかけ力	他人に働きかけ巻き込む力
	③実行力	目的を設定し確実に行動する力
考え抜く力	④課題発見力	現状を分析し目的や課題を明らかにする力
	⑤計画力	課題の解決に向けたプロセスを明らかにし準備する力
	⑥創造性	新しい価値を生み出す力
チームで働く力	⑦発信力	自分の意見をわかりやすく伝える力
	⑧傾聴力	相手の意見を丁寧に聴く力
	⑨柔軟性	意見の違いや立場の違いを理解する力
	⑩状況把握力	自分と周囲の人々や物事との関係性を理解する力
	⑪規律性	社会のルールや人の約束を守る力
	⑫ストレス管理能力	ストレスの発生源に対応する力

観光冊子を作成することで生徒の能力にどのような影響があるのかを調査するために、生徒を対象に「社会人基礎力」(経済産業省 2006) もとに G 高校が独自で作成したアンケート調査を実施した。

「社会人基礎力」とは、「前に踏み出す力」、

「考え抜く力」、「チームで働く力」の 3 つの能力 (12 の能力要素) から構成されており、「職場や地域社会で多様な人々と仕事をしていくために必要な基礎的な力」と定義されている。なお、生徒の理解を促すために、能力要素を学校生活に置き換えて表 1 のように具体例を提示した。

6 月に実施した事前アンケート結果は図 3 のとおりである。10 件法実施し、かなりできる (10・9)、できる (8・7)、たまにできる (6・5)、ほぼできない (4・3)、できない (2・1) で自己評価をした。

柱	能力要素	できない	ほぼできない	たまにできる	できる	かなりできる
前にふみだす力	①主体性		4	5	1	
	②働きかけ力		4	5	1	
	③実行力		6	3	1	
考え抜く力	④課題発見力		1	4	5	
	⑤計画力		2	7	1	
	⑥創造性	1	3	5	1	
チームで働く力	⑦発信力		5	5		
	⑧傾聴力	1	1	6	1	1
	⑨柔軟性		2	5	2	1
	⑩状況把握力	1	1	5	2	1
	⑪規律性			1	6	3
	⑫ストレス管理能力	1	2	3	3	1

図 3 能力要素の事前アンケート結果

生徒の多くが、「前にふみだす力」「考え抜く力」に自信がもてていないことが分かる。その一方で、「規律性」の数値が高いことが分かる。

柱	能力要素	できない	ほぼできない	たまにできる	できる	かなりできる
前にふみだす力	①主体性		2	7	1	
	②働きかけ力		2	7	1	
	③実行力		2	7	1	
考え抜く力	④課題発見力			5	4	1
	⑤計画力		1	8	1	
	⑥創造性		1	7	1	
チームで働く力	⑦発信力	1	2	6	1	
	⑧傾聴力	1	1	5	2	1
	⑨柔軟性		1	5	3	1
	⑩状況把握力	1	1	4	3	1
	⑪規律性			1	6	3
	⑫ストレス管理能力	1	2	3	2	2

図 4 能力要素の事後アンケート結果

以上のことから、教員が指示したことに対しては行動できるが、自ら考えて行動することは苦手な集団であるということが推察できる。そのため、本実践では、教員が

生徒の興味・関心を引き出し、生徒が主体的に行動できるように支援することが重要であると考えた。

(3) 地域課題探究型学習の変容的評価

活動を終え、生徒の変容を調査するために、図4のように能力要素の実践後の自己評価を実施した。9月に実施した事後アンケートは図4のとおりである。

すべての項目で数値が上昇しているが、特に「前にふみだす力」「考え抜く力」の値が上昇していた。また、図5のように10名の数値の合計値で変化をみても「前にふみだす力」「考え抜く力」の数値が大きく伸びていることが分かる。このことから、本実践が生徒の成長に寄与するとともに、当初のねらいどおり、教員側が授業をとおして身に付けて欲しいと願った主体的に行動する力が、生徒自身で実感できるまで伸ばしたと捉えることができる。

柱	能力要素	6月	9月	変化率
前にふみだす力	①主体性	151	164	108.6%
	②働きかけ力	143	158	110.5%
	③実行力	145	159	109.7%
考え抜く力	④課題発見力	184	202	109.8%
	⑤計画力	164	176	107.3%
	⑥創造性	145	152	104.8%
チームで働く力	⑦発信力	142	151	106.3%
	⑧傾聴力	158	164	103.8%
	⑨柔軟性	188	200	106.4%
	⑩状況把握力	177	186	105.1%
	⑪規律性	228	235	103.1%
	⑫ストレストロール力	175	186	106.3%

図5 能力要素の変容的評価

生徒は、この取り組みで感じた成果と課題、そして成長したことを、課題探究活動の成果発表会にて紹介をした。何度も観光地を選定し直したり、文章を校正したりして作成した観光冊子が形となって地域に配布されることや、地域で目にするのは生徒の自信につながっている。このことは、生徒の課外活動への積極的な参加といった行動変容でも伺うことができる。

(4) 「総合的な探究の時間」への進展

本実践は、観光立市を掲げている郡上市がコロナ禍で観光客が減っているからこそ、地域住民で観光地を盛り上げたいという願いから生まれた。これは、地域の抱えている課題を解決するために観光冊子を作成することで解決策を模索するという、地域をテーマにした課題探究型活動であった。また、観光冊子を制作するにあたり、事前に観光地を調べてくことや、期限までに原稿を完成させるなど計画的にこなしていくことや、観光地をプレゼンテーションした際に指摘されたことを粘り強く改善する活動は探究のPDCAサイクルを何度となく回していることであった。取材で地域住民と対話すること多くあったが、生徒が取材を重ねていく中で、生徒が「楽しさ」を実感している場面も多々あった。実際に、観光冊子づくりは8月末でいったん終了をしたが、生徒自ら、来年度の改訂版にも関わりたい、また取材に行きたいと述べていたことから伺えた。それは、地域住民という当事者である彼らが、郡上市の観光資源を発掘したと感じ、そのことを多くの人に知ってもらいたいと思うだけでなく、その思いを具現化する手段を得ているからだと推察している。使命感とともに充実感、そして達成感を得ているからこそその発言だと捉えている。

本実践をきっかけにして、学校全体にオンライン学習と探究学習の広がりを見せている。観光冊子を作成するにあたって高大連携のオンラインで講義を受ける様子は、多くの教員が参観し、その価値が校内でも広まることに寄与した。様々な場面で、オンラインだからこそできることが検討され、「総合的な探究の時間」では高大連携でのオンラインを利用した新しい展開ができるようになった。このような、様々な地域の人々から話を聞くことや、他県の大学生・

高校生と交流することは、どちらかという
と人間関係の変化が少ない中山間地域の生
徒の視野が広がることが期待できた。さら
には課外活動である郡上市総合計画策定に
向けた市民意見を提案するみらい会議に参
加するなど本活動が大きく広がりを見せた。
この会議で出された、郡上市の活性化のた
めに廃校を観光や市民活動の拠点として活
用する提案や、少子高齢化が進む中で支え
あう社会づくりのために高校生サポーター
団体をつくる提案は、オンラインツールを
利用して地域住民に発信され、地域の方と
連携して実現に向けて拡充している。これ
らの活動でも、観光冊子を制作したことが
生かされている。

生徒のこれらの姿を見ると、G 高校での
地域をテーマにした課題探究学習の経験は、
生徒の自己肯定感の高まりに寄与している
と確信できる。

5. おわりに

岐阜女子大学では、デジタルアーカイブ
の拠点大学として 2013 年より、その「知
的創造サイクル」を開発し、観光、教育分
野で人材育成の試行研究を行ってきた。そ
の研究成果として、沖縄県の小学校では有
意な学力の向上が認められ、デジタルアー
カイブの利活用が本事業の推進に有効との
感触を得ていた。

本研究では、デジタルアーカイブをさら
に有効的に活用し、新たな知を創造する本
学独自の「知的創造サイクル」を生かして
地域課題を探求し、深化させ課題の本質を
探り実践的な解決方法を導き出すことを高
大連携の教育活動により目指した。

今回の高校生により収集・記録された地
域資源や資料は、本実践で創作された観光
冊子と共に地域資源デジタルアーカイブに
追加して蓄積され、地域資源デジタルアー

カイブが様々な高大連携の実践により随時
増殖するというデジタルアーカイブにおけ
る「知の増殖型サイクル」が実現できた。

今後、学校教員においても地域の課題を
抽出することから始め、学校の知識を集約
して地域資源デジタルアーカイブを構築し、
このデジタルアーカイブを有効的に活用し、
地域の課題を実践的な課題解決の方法を導
き出す能力の養成が急務である。

地域資源デジタルアーカイブでは、自分
の生まれた地域のさまざまな文化資源など
をデジタルアーカイブしてみるにより、
これまでに気付かなかったさまざまなもの
が、素材を通して見える。この地域資源デ
ジタルアーカイブは、このように地域にお
けるさまざまなことを発見し、理解を深め
ていく上で大切な教育活動となる。

また、地域資源デジタルアーカイブには、
地域の人々の参加が必要となってくる。特
に、地域の資料の収集、デジタル化には、
地域の実情に応じた活動が重要であり、今
後、地域住民たちが身近な場で地域のデジ
タルアーカイブをすべきである。

このためには、学習者自らが自分たちの
「地域資源」をいかに主体的に発見・収集・
整理することができるかが課題である。また、
このような地域の人々や、大学、学校、社
会教育施設などとの協働によるデジタルア
ーカイブの活動を、地方創成イノベーション
の実現における教育活動の一環として捉
えることが重要である。

デジタルアーカイブは、単なる記録では
なく、研究成果、「知」を集積することがデ
ジタルアーカイブに問われている。学校が
学校としてのアイデンティティを確立する
ためにも、「知」の拠点としての地域資源デ
ジタルアーカイブを含めた総合的なデジタ
ルアーカイブを学校図書館において構築す
ることが求められている。